**第一話　退魔巫女・神宮寺瑠莉奈**

ザッ、ザッ、ザッ･･････。

　乾いた大地を踏みしめる音が静かに響く。歩くその者は、一般的な登山者の格好をしていなかった。白を基調とした修験装束に身を包み、藁で編んだ草履を履いて、編み笠を深く被り、柄の長い錫杖を手にしていた。恰好といい、雰囲気といい、漂わせる気配といい、ひと目でただ者でないことが伺い知れる。しかし、悲しいかな。雰囲気や気配以上にその者が醸し出している「女性」としての魅力が、彼女を俗物へと堕としてしまっているようだった。

　山奥をひとりで歩いているその者は、まったく、女としての性的魅力に富んでいると言わざるを得なかった。背丈は低く、身長はおそらく一五〇センチもないだろう。体幹は、全体的に「しっかり」しており、荒れた山を歩く動作に無駄がないことからも、相当、身体を鍛えていることが推測できる。しかし、如何せん、布地が厚い修験装束でも包み隠せないほどの肉体的特徴――すなわち、重々しく実った大きな乳房と、肉感たっぷりの大きなお尻の存在が、実像はともかくとして、彼女を娼婦のように淫猥な存在に貶めている感が否めなかった。

　ザッ、ザッ、ザッ･･････。

　彼女が乾燥した大地を踏みしめて歩くつど、その動きに合わせる形で大きな乳房が重々しく揺れ動き、大きなお尻が肉感たっぷりに上下する。歩くたび、まるで擬音が聞こえてくるようだ。

　ゆさっ、ゆさっ、ゆさっ･･････。

　むちっ、むちっ、むちっ･･････。

　布地を擦り合わせる形で生じる擬音は、決して気のせいではないだろう。実際、歩を進めるつど、身体の動きに合わせて重々しい肉がたっぷたっぷと揺れ動く音は、静寂を極めた山の中によく響いて、地中にまで浸透する感すらあるのだ。

まったく、豊満恵体を絵に描いたような身体つきをしているという他ない。

胸に実っている大きな乳房は、大玉西瓜をふたつ抱いているかのごとく巨大であり、ボリュームたっぷりで、張りがあり、歩くたびに身体の動きに連動して揺れ動く様はいやらしいことこのうえない。

安産型の大きなお尻もむちむちしていていやらしく、存在がまことに官能的であり、肉感たっぷりの桃尻は、厚い布地の上からでも割れ目がくっきりとわかるほどの重厚さを醸しだしていた。

乳房も、お尻も、形といい、肉づきといい、そしてボリュームといい、世界トップクラスだと断言していいだろう。修験装束を剥けばどれほど立派な裸体が露になるか、布地の上から想像しただけで垂涎ものの身体つきをしている。グラビアアイドルやモデルのスカウトが彼女を目にしたならば、迷わず声をかけてくるに違いないであろう。

　これは仮定の話だが、もし、彼女の周りに他に異性の登山者がいたならば、場所が山奥であることをいいことに、発情した猿のような行動をとってしまうに違いない。歩いている彼女を後ろから襲って、攫って、修験装束を剥いて、裸にして、欲望赴くまま怒張した肉棒を彼女のアソコに挿入しようとするに違いないのだ。

しかし、どんなに肉体が魅力的でも、容姿いかんでは、男の欲望を萎えさせてしまうのが世の常というものだ。天は二物を与えんということわざもある。乳房や尻がどんなに豊かで立派であっても、編み笠に隠された容姿は実はブサイクで、もしかしたら醜女であるのかもしれないのだ。

　しかし、違った。

天は、どうやら二物を与えたようだった。

修験者の格好をした豊満恵体の彼女がふと足を止め、無言で編み笠を上へと押し上げて周囲を見渡した時、覗いた容姿は大変美しく、整っていたのだ。はっきり言って、容姿端麗を画で描いたような美少女だった。

「･･････山全体が力を失っている。やっぱり、この山は魔なるモノに侵蝕されているとみて間違いなさそうね」

独白めいた口調で語る顔つきは、険しさと真剣さとを見本にしたような表情であったが、いかせん、迫力に欠けていた。容姿に幼さの成分が含まれていたからである。童顔、というべきか。彼女は年齢よりも幼い顔つきをしており、場合によっては実年齢よりも下に見えてしまうかもしれなかった。ただし、それが容姿のマイナス点として作用することはなく、むしろ五年後、一〇年後の成長を想像する余地を含んでいることで、魅力の水準を底上げしていると言って過言ではなかった。

　彼女の顔立ちは小さく、卵型で、端麗だった。大きな瞳は黒曜石のように美しく、鼻と口は小さく愛らしい。張りのある肌は白くて瑞々しく、シミがひとつもない。黒い艶のある髪は肩まで伸びていて、前面も、後面も、側面も、等しく均一に切り揃えられているところが、どこか神秘的な美しさを醸し出していた。

　端麗な容姿に、豊満な肉体を持ち、天にえこひいきされた存在としか思えない彼女は、名を神宮司瑠莉奈といった。年齢は、一七歳。三カ月前に計測した身体的数値は、身長一五四センチ、バスト一一三センチ、ウエスト五四センチ、ヒップ九八センチ、そして体重は五七キロと平均よりもやや重いが、これは当然といえば当然の数値である。なにせ、彼女は見た目のとおり、胸と尻が普通の女性たちよりもはるかに大きいのだ。その分、重くて当然である。

　彼女は先祖代々、陰に陽に、人に仇なす魔のモノを退治することで生計を立ててきた神宮寺家のひとりとしてこの世に生を受けた。血族は、本家と分家合わせて二〇〇人近くおり、ほとんど全員が、強い霊力を備えていた。血の濃さと先祖伝来の高い霊力を維持するため、近親婚を繰り返してきた歴史を持つからだ。現在も三〇人近い血族の人間が、修験者、代行術師、巫女、陰陽師、それにただの霊能力者など、立場や年齢で様々な職名を冠しながら、現役で退魔業に従事しており、瑠莉奈はその最年少従事者であった。彼女がこの山を訪れたのも、とある依頼を受けてのことだった。

**第二話　降星村からの依頼**

　･･････瑠莉奈がいま闊歩している降星山は、長野県と山梨県のちょうど境に位置している標高一八〇〇メートルほどの山だ。山裾はなだからで、深い森が両県一帯に広がっているのだが、山の名を冠する「降星村」の行政区分は山梨県側にあった。村の人口は最盛期には三〇〇〇人を超えていたが、現在は村外への転出と少子化によって減少の一途を辿っており、五〇〇人ほどしかいない。しかもそのうちの半分以上が六五歳以上という有り様であった。

　日本全国の村がかつてそうであったように、降星村もかつては栄えていたのだ。

この地一帯は、古くから恵み豊かな場所だった。シカやイノシシなどの獣が多く獲れたし、薬草や食用に適した山菜、多種多様な果物、それに沢では大粒の砂金がよく採れた。戦後になると天然物のマイタケや香茸の群生地であることが判明し、天然茸の産業は、林業と並んで村の主産業になったほどである。さらに平成に入ると、村を訪れた大学の植物調査によって強い抗癌成分を持った新種の固有シダ植物も発見され、これに目をつけた大手製薬会社が本格的な調査に乗りだすほどだった。

　村に伝わる話によると、降星山には、はるか昔、はるか宇宙から「肉の星」が降ってきたという。その「肉の星」を、当時、「醜い」という理由で村を追われた男が食べたことで、「神」になったという伝説が残されていた。神は名を「イド」といって、畏敬を込めて「イド様」と呼ばれていた。そしてこのイド様と「取り引き」したことで、降星山は自然豊かな山になったのだという。

麓には、イド様を祀った小さな神社があり、その近くには、人工的に掘られたトンネルのような洞窟が開いていた。この洞窟は、言い伝えによると、まるで迷路のように山全体に張り巡らされているとのことであったが、実際のところは、すぐ近くのところで行き止まりになっていて奥へ進むことはできない。一説によれば、イド様が地下をねぐらにするため掘った一部だと言われており、山全体に満遍なく張り巡らされていると言われていた。

　ただし、以上の話はすべて伝説である。根も葉もなければ証拠も根拠もない、古い村や集落であればどこにでもあるような話だ。

実際のところ、降星山の恵みが豊かである理由は、イド様なるモノの加護ではなく、村人たちが長年に渡って続けてきた山の保全活動が功を奏しているからだという話がもっぱらだった。村人たちによる定期的な山の保全活動――植林や伐採、間伐、下草刈りなど――は、環境意識が高まるはるか以前からおこなわれており、毎年、秋の時期になると、この時ばかりは男女を問わず、子どもから大人まで、幅広い世代が山へと入り、感謝を込めて、山を手入れをすることが習わしだった。

その際、時おり、行方不明者（それも若い女性ばかり）が出ることがあったが、問題となったことはなかった。ただの一度も。平成一五年には、村に帰省した都内在住の女子大生が、山の保全活動にボランティアで参加して行方不明になっているのだが、山で遭難した可能性があるにも関わらず、降星山一帯での捜索活動がおこなわれることはなかった。不気味なことに、娘が行方不明になったにも関わらず、家族が騒ぐことはほとんどなく、騒いだのは彼女の身を案じた彼女の友人や大学関係者ばかりであった。

だがその習わしも、若者の流出と過疎化の進行、そして極端な少子高齢化によって活動自体が難しくなると、降星山一帯の自然環境はたちまち悪化してしまう。外来種の動植物が蔓延るようになり、食用に適さない毒キノコばかりが生え、固有種が姿を消したのだ。そればかりではない。枯死する木が目立つようになり、大地もひび割れ、乾きはじめた。そしてこの頃から、降星山一帯で「化け物」を見たという報告が相次ぐようになったのである。

　村の上層部の間で声を潜めるでもなく、半ば公然と、おぞましい会話が交わされはじめたのもちょうど同じ頃であった。

「沢で砂金を採ってたいたら、気持ち悪い化け物を見た。赤い目をした奴だ。きっと、イド様のお使いさんが現れたに違いない」

「山菜取りに出かけた田吾作が、山でお使いさんを見たそうだ。なんでもお使いさんは、触手で捕まえたアライグマを貪り食ってたそうだ」

「久しく「贄」を捧げていないからなぁ。イド様が、贄を求めているんだろう」

「やはり、贄を捧げねばならんか･･････」

「しかし、どうする。捧げようにも、村に残ってる若い娘は少ないし、ブスたちばっかだぞ？　外から呼ぶにしても、いまの時代、行方不明になったら即話題になっちまう」

「野崎のところの娘は、器量良しで贄の有望株だったんだがなぁ。あの野郎、東京に逃げやがって」

「いっそ、このまま枯れるに任せるか。古い契約も、悪しき因習も、断つべき時がきたんじゃなかろうか」

「阿呆。そんなことしたら、イド様がなにするかわからんぞ。哀れではあるが、昔っから、犠牲が娘のひとりやふたりで済んでいるんだ。事が上手くいっている以上、藪から蛇をつつきだすような真似をせんでもいいだろうが」

「じゃあ、どうする？　贄を、どう用意する？」

「うーむ･･････」

令和の時代とは思えぬぶっそうな会話が、村を取り仕切る男たちの間で交わされたのだった。

それは固有種の調査を進めていた大手製薬会社の耳にも届いた。製薬会社は、さっそく現地へ社員を派遣し、村の上層部の者たちから話を聞いた。

　村の上層部の者たちは、最初、話すことを躊躇っていたが、大金をちらつかせられると、しぶしぶとではあったが、口を割った。

「まぁ、信じてはもらえないでしょうが･･････」

　そう前置きをして語られた内容は、あまりにも荒唐無稽な話であった。降星村では、恵み豊かな山の自然を守るため、山に潜む超常の存在に昔から「生け贄」を捧げており、その因習が、山の保全活動というていで、つい最近まで、ひっそりと続けられているというのだ。情報と科学が発達した現代の人間からすればとても信じられないような内容である。しかし、語る者は口では冗談めかして言いつつも、目はぞっとするほど真剣そのもので、内容も濃く、それが逆に信憑性を高めていると言っても過言ではなかった。

「器量のよい娘を何人か山に連れていくと、その中から生け贄となる娘を、イド様のお使いさんが連れていくんですわ。いわゆる、神隠しって奴ですね。連れていかれた娘がどんな目に遭っているかはわかりません。なんせ、もう二度と、戻ってこないんですから。でも、娘が生け贄に選ばれて連れて行かれると、決まって山は豊かになるんです。緑豊かになって、キノコもよく採れるようになるんですわ。でも、最近は、イド様に生け贄を捧げることができておりませんでした。いえ、実際のところは、山に娘たちを連れていっても、生け贄として選ばれなかったというのが実情です。理由は、わかっています。器量の悪い娘や肥満体質な娘しか用意することができなかったからですよ、はい。器量のよい娘や見目よい娘は、みんな生け贄に捧げてきてしまいましたからね。村にはもう、ブサイクな娘たちしか残っていないんです。だからきっと、イド様は生け贄を連れて行かなかったんでしょう。イド様が最後に生け贄を連れて行ったのは、平成一五年が最後ですね。ほれ、女子大生が行方不明になった事件があったでしょう。あの娘が最後ですわ。こんな話、信じちゃもらえないでしょうから、笑ってくれて構いませんよ」

だが、製薬会社の担当者は笑わなかった。

むしろその逆だった。

「なるほど、そのような事情があったのですか。聞けてよかった」

　製薬会社の担当者は頷いた。

公にはされていないものの、大手企業のなかには長年の調査と情報収集によって、世には「超常の存在」や「公にできない風習」があることを確信している企業があって、大手製薬会社はまさにその企業だったのだ。

製薬会社の幹部と村の上層部は事態を打開するための協議をもった。

その結果、事態を打開するため、退魔を生業とするその道のプロである神宮寺家に依頼することが決まったのである。

依頼は製薬会社が担い、短い交渉の末、神宮寺家との間で契約が成立。報酬は全額、前払いという形で先に支払われた。この時、報酬と一緒に降星山に関する伝承や噂話、事件や事故、あるいは報告されている怪奇現象などの情報が神宮寺側に渡されたが、それらはすべて「公」にされているものばかりであったのは、完全に意図的なモノである。そしてこの時、依頼主側から注文が付け加えられた。

「降星山は地元で神聖視されている山ですので、できれば女性の退魔師を派遣していただきたい。それも若い女性で、容姿が端麗であればなおありがたい」

唐突な注文は、神宮寺家側に警戒をもたらした。

（違和感がある。この依頼、なにか裏がありそうだ･･････）

　依頼の体を成した罠というモノは、昔からあることだった。そのなかでも一番多いのが、依頼の名を借りた「供物代行」で、邪神や魔なるモノに、討伐に赴いた神宮司家の者が貪られたことは一度や二度ではすまなかった。

だが、警戒はすぐに解かれた。依頼主側が、神宮寺家の交渉担当者に対して、そっと少なくない額の賄賂を贈ったからである。金の魔力というものは恐ろしいもので、神宮司家側の交渉担当者は、分厚い封筒を受け取ると、それを懐にしまいながら、満面の笑みを顔に浮かべたのだった。

「ま、退魔の生業に危険はつきものです。呪われたり、精神を病んだり、あるいは命を落とすことも珍しくはありません。山では珍しいですが、男子禁制の地はたくさんありますからね。ま、なにがあってもおかしくないということで」

という経緯で、瑠莉奈の派遣が決まったのだった。選ばれた理由は、彼女が依頼主側の希望に沿った容姿をしていたからで、能力や才能、あるいは退魔巫女としての実力うんぬんではなく、依頼通り、容姿うんぬんで。

自分の預かり知らぬところでそんなやりとりがおこなわれているとは露知らず、この時、瑠莉奈は霊力を高めるため赤石山脈で回峰をおこなっていた。依頼先が隣県の山奥ということもあって、彼女はそのまま修験装束の格好でこの地を訪れたのだった。

そして、現在にいたるのだった。

**第三話　魔なるモノとの遭遇**

　ザッ、ザッ、ザッ･･････。

　乾いた大地を踏みしめながら、瑠莉奈は山を奥へ奥へと進んでゆく。ボリュームある大きな乳房を揺らし、肉感たっぷりのお尻をむちむちとさせながら。しかし、その表情は相も変わらず真剣そのもので、眼光の鋭さといったらまるで猛禽類のようだった。

　その鋭い眼差しのまま、彼女は呟いた。

「･･････魔のモノは、本能的に暗い場所を好むもの。だとすれば、日中に潜んでいる場所があるはず。たとえば、そう、地下とか、あるいは洞窟とか」

闇雲に歩いても体力を消費するだけだ。あるていど、目星をつけておく必要がある。瑠莉奈は知識と経験から、魔のモノの棲み家を推測し、そこを見つけるべく、重点的に目を凝らして行動した。

　それはほどなくして実を結んだ。山の斜面に、隠れるようにして開いている縦穴を発見したのだ。その穴からは、生暖かい風が噴き出ており、その風の中に、微かな獣臭が含まれていることに瑠莉奈は気づいた。

「この穴、怪しいわね」

瑠莉奈は、かつてこの山で、何人もの若い女性が行方不明になっているという話を思いだした。もしかしたら、このような場所が山のいたるところに空いていて、女性たちはその穴から地下へと連れ去られたのではないだろうか。

だとしたら、穴へ入ることは危険であるに違いない。降りた先で魔のモノが待ち構えているとしたら、それはまさに、飛んで火にいる夏の虫のごとき末路を辿るかもしれないのだ。しかし、虎穴に入らずんば虎児を得ず、ということわざもあるように、魔のモノを退治するためこの山を訪れた以上は、あるていど、危険を冒す必要がある。それに、彼女は自分の「力」に絶対の自信を持っていた。一族から受け継いだ霊力は、度重なる厳しい修行によって強化されており、その霊撃たるやもはや「兵器」として通用するほどの威力を誇る。慢心とは呼べないまでも、確かなる実力に裏打ちされた実力が瑠莉奈にはあり、そのことが、彼女の決意を後押ししたのだった。

「よし」

気合いを入れ、瑠莉奈はしゃがんで足を穴へと入れた。灯りは、懐中電灯という文明の利器を頼りにした。霊的感知能力で周囲を警戒しながら、ゆっくりと地下に向かって降りてゆく。このような行動を取ることに、彼女は慣れていた。

　予想外だったのは、竪穴の中が予想以上に狭かったことだ。穴の底から噴いてくる風の量と勢いから推測して、地下にはかなり広い空間があると思われるのだが、底に着くまでの途中、瑠莉奈の大きな乳房やお尻がやたらと壁面に引っかかって苦労したのだ。ごつごつとした岩肌に乳房があたってたわみ、尻が引っかかると、装束が脱げそうになった。瑠莉奈はそのつど、柔軟な身のこなしで詰まることはなかったが、乳房や臀部が邪魔になるつど、自らの身体に対して悪態をつくことしばしばだった。

「もうっ！　我ながら、なんて邪魔なおっぱいなのかしら！　お尻も引っかかるし、ホント、嫌になっちゃうわ！　いつか整形して、絶対に小さくしてやるんだからっ！」

地の底に着くまでの間、何度、激したことか。無理もない。実際、大きな胸や尻が降りる際の邪魔になっているのだから。

大きな乳房や肉づきのよいお尻というものは、異性からは欲望の眼差しを、同性からは嫉妬と羨望の眼差しを向けられるものだが、望まない当事者にとっては、邪魔な存在以外のなにものでもない。かつて推定Ｆカップの女性テニスプレイヤーが、競技の邪魔になるという理由で乳房の縮小手術を受けた話もあるように、大きな乳房やお尻というものに悩んでいる女性は決して少なくないのだった。瑠莉奈にとってもそうであった。

「まったく、なんでわたしはこんな体に生まれちゃったのかな。ホントに邪魔なんだから、もうっ！」

怒れる瑠莉奈だが、自分がこんなにも淫らな肉体でもって産まれてきた理由は、実はわかっている。先祖代々、同族間で繰り返してきた血族近親婚のせいだ。

　神宮寺家では、子孫に先祖由来の霊力と能力を継承させるため、古くから近しい間柄での血族婚が推奨されてきた。時おり外部から血を入れることもあったが、口にするのもはばかられるような関係のほうがはるかに多かった。父親と娘が、姉と弟が、あるいは祖父と孫娘までもが性的関係を持ち、子を成してきたのである。つまり、昔から人間の歪な品種改良をおこなってきたのだった。瑠莉奈の両親も叔父と姪という間柄である。

　現代医学でも判明しているとおり、近すぎる濃い血は次世代に強い影響を及ぼす。それは知能や精神、特に身体的な特徴に如実に現れ、瑠莉奈に関しては見た目のとおりである。神宮寺家には彼女の他にも、超乳の女性が多くいるし、極端に筋肉が発達した者や、背がとても高い者、病気に対する強い抵抗を持つ者や、それに馬並に大きなペニスを持った男性も多くいた。そして、誰も彼もが強い霊力を兼ね備えているのだった。神宮司家に強い霊能力者が多い理由は、そのような事情があるからであった。

　やがて、苦労しながらも、瑠莉奈は地の底についた。

　そこは巨大な地下の空間だった。洞窟、というよりは、トンネルのような場所だというべきか。水も溜まっていなけれな、鍾乳石もない。明らかに、何モノかの手によって刳り貫かれたような空間が伸びていた。瑠莉奈が通ってきた縦穴は、この洞窟の側面に通じていた。

「広い。地下にこんな広い空間があったなんて」

地下トンネルは、高さも、幅も、三メートル以上はあるだろうか。予想外の広さに、感嘆のため息を吐きながら懐中電灯の光で周囲を照らす。天井を、壁を、トンネルの奥を、反対側を――その、直後だった。懐中電灯の光の中に、異形の存在が浮かびあがったのは。

「ウギイィィィ･･････」

「ッッッ！」

予期していなかった異形との突然の遭遇に、瑠莉奈の心臓が大きく鳴り響いた。霊力による探知は怠っていなかったのに、自分が異形の気配にまるで気づけなかったことも驚きだったが、次の瞬間、瑠莉奈の口から出た言葉は、戸惑いでも困惑でも悲鳴でもなく、疑義の体を成した固有名詞の単語だった。

「さ、猿ッ！？」

そう、猿だ。瑠莉奈が持つ懐中電灯の光が照らし出した異形の怪物は、紛れもなく猿だった。しかし、ただの猿ではなかった。大きさは、二メートル以上はあるだろうか。瑠莉奈より遥かに大きく、ゴリラのような巨体だが、風貌は日本猿そのもので、それが幽鬼のようにと立っており、驚く瑠莉奈に見下ろす形で視線を向けていた。その目は大きく、赤い色をしており、暗く不気味に輝いていた。一瞬、日本猿の変異種かと思ったが、巨大猿の身体から無数に生えている赤黒い触手の存在が、目の前の異形の怪物がただの動物でないことを証明していた。

「くっ！」

瑠莉奈は巨大猿との距離をとった。地を蹴り、後ろに下がり、向き合う。その際、大きな乳房が、まるで存在感を強調するようにぶるんと揺れた。

「間違いないっ！　おまえがこの山に棲む魔なるモノねっ！」

　瑠莉奈は懐中電灯を捨て、片手で作った印（これは大きな乳房が邪魔をして両手で印が組めないからである）を構える。そして、神宮司家口伝の真言を唱え、指先に霊力を集中した。

「オン・マニマニ・ウラド・フーム！　悪しき御霊に支配されし魔なるモノよ、我が破邪の霊撃を受け、弾け飛ぶがいい！　タクラカンッ、爆ッ！」

集中した霊力が、目に見えぬ衝撃となって放たれた。その衝撃で、ボリューム豊かな乳房が大きく揺れた。

次の瞬間――大猿に、瑠莉奈が放った霊撃が直撃した。

ドオォォォンッ！

　攻撃事態は目に見えない。しかし、その威力は凄まじく、まるで無反動砲が直撃したような爆発が生じて、大猿の身体が弾け飛んだ。

　どばッ、どべちゃっ。

びちょっ、べちゃ、ぴちょ･･････。

大猿の毛皮が肉もろとも爆散して、洞窟の壁や天井にこびりつく。濃い、血の臭いがした。勝利を確信した瑠莉奈が、顔に自信たっぷりの笑みを浮かべて、勝ち誇った声をあげた。

「我が霊撃は、一撃で車をも破壊する。たとえ即死を免れたとしても、直撃を受ければただでは――」

そこまで言った時だった。爆煙が晴れ、傷ついた大猿の身体が露になったのを見て、瑠莉奈の顔から音を立てて血の気が引いた。ザーっ、と。

おぞましいモノを見たからであった。

じゅるじゅるじゅる･･････。

じゅるじゅるじゅるるる･･････。

湿り気を帯びるようにして、蠢き動く音がした。いや、実際に、蠢き動いていた。宙空で、まるで踊るように。ソレらが発する音からも、その動きは推測できるだろう。おぞましく、不気味に、気色悪く、ゆらゆらと蠢き動いているのだ。灰色に輝く触手の群れが、まるで動物に寄生したイソギンチャクのように。

ソレを見て、瑠莉奈の口からうわずった悲鳴が漏れた。

「ひっ･･････！」

無理もない。おぞましく蠢き動く音の正体は、生理的な嫌悪感を掻き立てずにはいられないほど気色の悪いモノだったからだ。

じゅるじゅるじゅる･･････。

じゅるじゅるじゅるるる･･････。

湿り気を帯びた音を立てながら、音の源が蠢き動く。灰色に輝くねばねばとした触手の大群が、宙空にて、じゅるじゅると蠢き動いているのだ。

「な、なんておぞましい･･････！　気色悪いっ！　猿に寄生して、その身体を乗っ取っているのね！」

言いながら、キッと睨みつける瑠莉奈。額から汗が流れ、顔からは血の気が引いているものの、怯んだ様子はなく、戦意も衰えた気配がなかった。このようにおぞましい姿形をした敵と対峙したことは、これがはじめてではない。悪霊が乗り移った腐乱した屍体と戦ったこともある。活発に蠢き動くこの灰色に輝く触手こそ、化け物の正体だと確信した瑠莉奈は、さらなる霊撃を放つべく印を構えた。

その、直後だった。

　対峙する大猿側に動きが生じたのは。

「ニ、ニ、ニエエエエ･･････ッ」

　大猿が、吠えるように喋った次の瞬間だった。

ごばあああああああっっっ！

咆哮に呼応するようにして、胸元で蠢き動いていた灰色に輝く触手の群れが、一斉に瑠莉奈めがけて襲いかかってきたのだ。まるで海中で獲物に襲いかかる蛸のような勢いで、四方八方から触手が伸びて向かってきたのである。

しかし、瑠莉奈の方が早かった。

「ふんっ、この程度の攻撃で、わたしを捕まえられると思うなっ！」

自信たっぷりに言うや否や、地を蹴り、ジャンプして、まるで体操選手のように回転しながら後方へと下がる瑠莉奈。距離をとり、再反撃するには最善の一手であったに違いない。しかしこの時、回避行動をとった彼女にとって予想外だったのは、下がった後ろで「ドンッ！」となにかにぶつかったことだろう。

「えっ」

一瞬、壁にぶつかったと思った。しかし、反射的に振り向いて後方を確認した時、自分がぶつかった存在を見て、瑠莉奈は大きく目を見開いたのだった。

「･･････！」

「ニ、エエエエ･･････」

瑠莉奈の後ろに、赤い目をした大猿が立っていた。直立で、まるで幽鬼のように。見下ろす視線が、瑠莉奈と合った。

「な、な――ッ！」

意表を突く衝突に、言葉を失う瑠莉奈。一瞬、後ろにまわり込まれたと思ったが、すぐにそうでないとわかった。身体が傷ついておらず、触手の群れが露になっていなかったからだ。つまり、大猿の化け物は、もう一匹いたのだ。

「ま、まさか、二匹いたなんて･･････っ！」

慌てて印を組み、攻撃を仕掛けようとするが、この時、後ろへの警戒がおろそかになった。ドスッ、という音がして、首筋になにかが打ちこまれたのだ。

「･･････ッッッ！」

やられた――と瑠莉奈は思った。

　一瞬にして身体が硬直し、動かなくなる。視界がぐにゃりと歪み、身体のバランスが崩れた。ドサッ、という音を聞いた時、瑠莉奈は地面と抱擁していた。土の匂いが鼻を突く。そして、薄れゆく意識のなか、彼女は聞いたのだった。無数の声を。

「ニ、エエエエ･･････」「ニ、エエエエ･･････」

「ニ、エエエエ･･････」「ニ、エエエエ･･････」

「「ニ、エエエエエエエ･･････」」

同じ発音でありながら、どれもが異なる声質をしている。それが周りから、たくさん聞こえてきたのだ。近づく気配を感じて、瑠莉奈はギリッと歯を噛みしめた。

（に、二体だけじゃ、なかっ･･････）

自分の不甲斐なさ、あるいは未熟さに怒りを覚えながら、瑠莉奈は、自分の意識が、遥か闇の底へと落ちていくのを感じていたのだった･･････。

**第四話　深淵の悪夢**

　･･････深い闇の奥底で、瑠莉奈は夢を見た。それはドロドロに溶け、混じり合い、個を失って深淵の世界で蠢き動く悪夢のような記憶だった。

　夢のなかで瑠莉奈は、無限に広がる暗黒宇宙を光速で漂う存在――定まった形を持たぬ肉の塊であった。すでに記憶は不確かで、意思もおぼろげなモノしか有していない。しかし、霞のように消えつつある記憶のなかで、いまもなお覚えている光景は、億を超える兄弟たちが貪り喰われる景色だった。

　喰われる、喰われる。

　産み落とされた兄弟たちが、あちらこちらで貪り喰われる。灰色に輝く肉の触手に捕まって、産まれた場所たる灰色に輝く海の中へと引きづり込まれてゆくのである。あちらで、こちらで、見渡す限り何処かしこで。

　いったい、誰がこんなことをするのか。

　親だ。自分たちを産み落とした「親」が貪り喰っているのだ。地の果てまで続くような灰色に輝く肉の海――それこそが、自分たちを産んだ存在だった。

　瑠莉奈は逃げた。親の身体から伸びた億を超える触手の追撃を交わし続け、哀れなる兄弟たちの犠牲と引き換えに生じた一瞬の隙を突き、自らを産み落とした存在が巣食う惑星を離れて宇宙への逃走に成功したのである。

それ以来、すでに気が遠くなるほどの時間を宇宙での移動に費やしていた。その間に、超新星爆発に巻き込まれたり、ブラックホールの重力に捕らわれて引きずり込まれそうになったこともあったが、それでも運よく生命を保てていた。

　いったい、何処を目的として移動しているのかわからない。

　しかし、暗黒の宇宙を飛び続ける理由だけはわかっていた。

　安住の地を見つけ――そして喰らうためだ。

産み落とした我が子を、貪り喰らうためだ――。

･･････そして、その気の遠くなるような永い旅路の果てに、瑠莉奈は青い星に辿り着いたのだった。見覚えのある惑星に。

　地球に堕ちた瑠莉奈を待ち構えていた運命は、かつて辿るべきはずだった運命の再来だった。すなわち、捕食である。明確な意思を持たず、ただ弱々しく蠢き動く肉塊を捕食することは、現地生物にとって容易いことであったに違いない。しかし、捕食と吸収は同義ではなかった。咀嚼され、胃酸の中で溶けたとしても、その程度で死ぬようなか弱い存在ではなかったのだ。生じた結果は、その現地生物との細胞単位での融合だった。

　瑠莉奈を喰らったその現地生物は、酷く醜い存在だった。顔も醜ければ、身体も奇形そのものだった。顔は潰れたように歪み、腰は折れ曲がり、手足はねじれていた。姿形が同種族と明らかに異なるだけでなく、動けることが奇跡としかいえない形状をしていた。しかも皮膚には天然痘を患った痕すらあったのだ。ひと言でいうならば、彼の姿は「化け物」で、その蔑称は、そのままその者に用いられた蔑名でもあった。

瑠莉奈を喰らったその現地生物は、人間と呼ばれる種の雄だった。人一倍、性欲が強く、常に雌との生殖行為を切望している個体だった。だが、容姿と肉体が醜かったゆえ、願望を遂げることができず、むしろ性的欲求に端を発する奇行が災いして山へと追いやられていたのだった。乾いた山へと。

「犯したい、あぁ、犯したい･･････女を――女たちを、乳房をめちゃくちゃにしながら、犯したい･･････あぁ、あああぁ、あああああ･･････」

空腹の最中であっても、頭の中は異性との性行為で一色だ。

もはやそれしか考えられない。

あまりにも性欲が強いため、股間から生えている生殖器は勃起したまま萎える気配なく、常の排尿でも困難を極めるほどであり、その先端からは、昼夜を問わず我慢汁が垂れて止まなかった。ゆえに、空腹を満たすため、落ちていた灰色に輝く肉塊を喰らった際も、それが「ナニ」であるか考えたことはなく、ただ胃を満たしたいがために食べたのだった。そして、その行為が、男を真の意味での化け物へと変貌させたのであった。

「うがああああああああああああああああッッ！　か、身体がッ、からだがああああああああッッッ、あ、熱いッッ、熱いいいいいいいいいいッッッ、ぐがあああッッ、いいい痛いッッッッ、くくく苦しいいいいいッッ、があッ、があああああああああッッ！　あうッ、ぐがッッ、ぐがががごががががああああああああああああああああああああああああああああああああああああああッッッッッッッ！」

　地の果てまで響くような恐ろしい叫び声と共に、悶え、苦しみ、地面を転げまわるようにのたうつ男。ほどなくして男の肉体に変化が生じた。身体の表面がボコボコと激しく波打ったかと思うと、瞬く間に崩れ、軋み、壊れはじめたのである。凄まじい音がした。

　メギメギッ、ゴギィィッ、ボギギギッ、グゴオオオッッ、ボゴボゴボゴボゴボゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ･･････ッッッッ！

　ドブヂャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアァァアァァアアァァアァアァアァァアァアァア･･････ッッッッ！

「うがあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああッッッ！」

男の身体が内側から壊れた。

灰色に輝く謎の肉を喰らったその男は、人としての形を保てなくなり、溶け、手や足や頭がひとつに混ざり合い、血管が破れて血が流れだし、消化液が破れた腹から噴出して、変色した皮膚が膨らみ、肉が膨張し、やがて全身が丹念に潰された肉のような状態となって、ドロドロの流動体に成ってしまった。

それは遺伝子単位での変貌だった。異なるふたつの種が混じり合った結果生じた悪夢の異形変異だったのだ。

そして、その変異が落ちついた時、その場に残っていたのは、人間ではなく、ましてや肉塊でもなく、灰色に輝く色をした、おぞましき肉の流動体だったのだ。

どろどろどろどろどろろろろろろろろ･･････。

ぐじゅるじゅるじゅるぐぢゅるるるる･･････。

それはうねりそのものだった。蠢き、動き、定まった形を保てない。その量いかんによっては「肉の海」と形容することもできるだろう。しかしこの時はまだ、それほどの量がない。せいぜい、風呂一杯分の量だ。ゆえに、粘菌のような粘性生物、アメーバ、生きている泥、もしくは不浄なるスライム、そう呼ぶのが適切で、想像も容易いかもしれない。

この灰色に輝く肉の流動体には、明確な意思はなく、目的もなかった。あるのは互いに混じり合ったふたつの本能だけ。そしてその本能こそが、異なる存在の両者を融合させた遠因であったのだ。

　片方は、自分を拒絶した異性の同族を隅々まで弄び、犯して犯して「子」を産ませること。もう片方は、産んだ「仔」どもを本能赴くまま永久に貪り喰らうこと。その目的を叶えるための醜悪なる異床共夢の関係が、種族も生物も根底から異なる存在をひとつにし、凶悪なる怪物へと変貌させたのだった。

そして、兇悪なる欲望の爆発によって、悲惨な目に遭う女たちが相次いだのだ。

　灰色に輝く肉の流動体は、本能に従って地下へと降りていった。地面を溶かすように穴をあけ、ほじくりながら。そして、地下の空間に到達すると、その底に溜まり、そこを自らの寝床としたのだった。「親」であるオリジナルから引き継いだ本能に従って。

　灰色に輝く肉の流動体は、偶然にも、地下に迷い込んできた哀れなる猿たちを自らの使徒に仕立てあげた。伸ばした触手で猿を捕らえると、寄生の加護を与え、脳を支配し、身体を変貌させて、赤い目をした御使いにしたのだ。

「ヴギッ、ヴギギギギギ･･････！」

「ヴギギギイィィイィィ･･････！」

御使いとなった猿たちは、凶悪無比な存在と化した。巨大化し、全身に力を漲らせ、加護の影響で欲望ぎらつく赤い目を輝かせながら、人間が住む周辺の村々を襲い、人を攫ってきたのだった。自分たちの「神」である灰色に輝く肉の流動体の本能を満足させるべく。

拉致されたのは、容姿が美しく、豊かな肉体を持つ女たちだった。攫われた彼女たちは地の底へと連れて行かれて、そして堕とされることになった。まるで地底湖のように溜まった灰色に輝く肉のうねりのなかへと。

　灰色に輝く肉の流動体の中へと堕とされた女たちを待ち受ける運命は悲惨を極める。着ていた物を剥ぎ取られ、裸にされて、その肉体を隅々まで貪り嬲られるのだ。

灰色に輝く肉の流動体から生える無数の触手たちによって、その肉体をより淫らに造り変えられながら、穴という穴を犯されるのである。そして、産まされるのだ。何万という数の仔を、股穴から、尻穴から、口穴から、そして乳穴から、ぶりゅぶりゅと数限りなく出産させられるのである。

　肉体を貪り、嬲られ、弄ばれて、おぞましき仔たちを果てしなく産まされる女たち悲惨さといったらない。まさに阿鼻叫喚の地獄絵図だ。

「あぎゃあああああああああああああああああッッッッ！　おっぱいッッ、ああああたしのおっぱいがッッ、おおおおおっぱいがあああぁぁあぁあぁああぁぁあぁぁああぁぁぁぁあぁぁぁッッッ！」

「ぎひいいぃぃぃぃぃぃいぃぃいいぃぃぃぃッッいぃぃいぃぃぃぃッッ！　ほ、ほじくられるッッ、おおおおっぱいをッッ、ちちちち乳首をッッ、ぐぎいいぃいぃぃぃいぃぃいぃぃぃぃいぃぃぃぃぃぃッッッ！　ひひひ拡がるッッ、乳首がッッッ！　ぐががあああああああああああぁぁぁあああぁあぁあぁぁあぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁッッッ！」

「うぎゃああぁああああぁぁぁあぁぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁあぁぁぁッッッッ！　ううう産みたくないッッ！　おおおおおっぱいからッッ、むむむ蟲を産むなんでッッ！　ううう産みッッ、産みだぐなッッッ、うがああああああああああああぁあぁぁあぁあぁぁあぁぁぁッッッッ！」

　灰色に輝く肉から伸びる数えきれないほどたくさんの触手によってその肉体を弄ばれる女たち。生きたまま、地獄を味わう。

　灰色に輝く肉の流動体に貪られるように弄ばれる女たちは、みな一様に、同じ目に遭っていた。灼熱の激痛を伴う毒液を乳房に繰り返し注入され、自分の身体よりも大きく膨らまされた乳房を、丹念に弄ばれながら、男性器のように勃起してそそり立つ乳首穴のなかに大小無数の触手を挿入される。そして乳腺を隅々までぐちゃぐちゃとほじり尽くされると、その中に大量の「卵」を産みつけられるのだ。灰色に輝く肉の分身体を。

　卵の形状をした分身体は、泣き叫び、苦しみ悶える女たちの絶望を養分に成長すると、やがておぞましい「幼蟲」のような形状に成長し、そして排出されるように飛び出してくるのだった。大きく膨らんだ乳房の奥底から這いのぼるように出口にまで到達すると、醜悪な形に勃起した乳首穴をメリメリとこじ開けて、両方の超乳房から、一斉に、勢いよく、外に飛び出てくるのである。

　酷い排出音が木霊し響いた。

ぶりゅぶりゅぶりゅぶりゅぶりゅぶりゅりゅりゅりゅううううううううううううううう･･････っっっっっ！

ぶりゅぶりゅぶばどばばぶりゅどばばばばばばああああああああああああああああああ･･････っっっっっ！

「「「うぎゃああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああッッッッッッッ！」」」

女たちの悲惨極まりない悲鳴絶叫が地の奥底で木霊し響く。改造された超乳房からの出産は、決して一度では終わらない。何度も続くのだ。何度も、何度も、何度も何度も、ずっとずっと続くのだ。

（や、やめて･･････！）

瑠莉奈は叫んだ。思わず、叫んでしまった。自分がいま見ている光景は、すでに起こったことであり、終わった過去であるということを頭では認識していた。ゆえに、無駄だと判ってはいた。しかし、叫ばずにはいられなかった。女たちが、あまりにも可哀そうだったから。

（お願いっ、お願いだからっ、もうやめてあげてっっ！　お願いだから、やめてあげてえええええっっっ！　やめてあげてったらああああああああああああああああっっっっ！）

　しかし、女たちを襲う悪夢は終わらない。改造された乳房を弄られるだけでなく、その豊満なる肉体を、大小数えきれない触手でもって、文字通りの意味でぐちゃぐちゃにされるのだ。まるで、子どもが捕まえた昆虫で遊ぶように。それはとても正視に耐えうるものではなかった。

「うぎゃああああああああああああああああああああああああああッッッッ！　死ぬッ、死んぢゃうッッ、死ぬうううううぅぅぅうぅぅぅぅうぅぅぅぅぅうッッッッ！」

「はがあああぁあぁぁあぁぁあぁぁぁぁぁああぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁッッッッ！　おおおお腹がッッ、や、破れッッ、ははは破裂ずりゅぅぅぅぅぅぅぅうううぅうぅぅぅぅッッッッ！　ぶげああぁあぁぁあぁあぁぁぁああぁぁぁぁあぁぁぁぁぁッッッッ！」

「あひゃひひゃああぁぁあぁぁああぁぁあぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁッッッ！　あ、頭ッッ、あだまおがじぐなるッッ、あだまッ、ががががぎまぜッッ、あひゃひゃひゃふひゃあひゃあははははあああああああああああああああああッッッッッ！」

「ご、ごろじでッッッ！　おおおお願いッッッ、ごごごごごんな目に遭うぐらいならッッ、いいいいっぞッッ、もうッッッ、ごごごごごろじでぐだざいいいぃぃいぃぃいぃぃぃいぃぃぃいぃぃいぃぃぃぃぃッッッッ！」

「んがああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああッッッッッッ！」

　泣き、叫び、苦しみ悶える女たちの身体からは、生命力の源である「生気」が放出され、それが乾いた山を潤していた。場所が地下である分、山への浸透と吸収も良いのだろう。そして、女たちが苦しめば苦しむほど、放出される「生気」の質が増しているようだった。

　荒廃していた山が恵み豊かな大地へと変貌し、山が豊かになった。水気に富み、緑豊かになり、獣も増えた。それに味を占めた人間たちは、同胞たちをこぞって送り込むことを選択する。生け贄として、女たちがどんな悲惨な目に遭うことになるかも理解せず･･････。

　その時だった。

　瑠莉奈の耳に、恐ろしい声が聞こえてきたのは。

「次ハ、オ前ノ番、ダ･･････」

　　　　　　　　･･････続きは本編でお愉しみください。